

スタンフォード大学フーヴァー研究所文書館が所蔵する 戦中戦後の中国関係資料について

松本 俊郎

1. 資料へのアクセスについて

2007年4月から文部科学省国際化推進プログラム（海外先進研究実践支援）の奨学金を得てカリフォルニア州立大学イースト・ベイ校（Hayward）で研修を続けている。East Bay 地域に居住できるという好機を利用して、研修先での生活が落ち着いてきた6月から、折を見てはスタンフォード大学フーヴァー研究所の文書館（Archives）を訪れてきた。同研究所には Archives とは別に Hoover Library も設置されている。ここでは同 Archives の利用方法とそこに所蔵されている中国関係資料について、私の関心に引きつけながら、紹介させていただくことにする。

はじめに大学図書館全体との関わりについて触れておくと、スタンフォード大学には Coordinate Libraries を含めると 20 を越える図書館が設置されており、その所蔵書籍は検索サイト SOCRATES によって一括検索することができる。

サイト (1) : SOCRATES = Stanford Online Catalog

<http://library.stanford.edu/socrates>

このサイトを利用すると中国近現代史に関係する貴重な資料や書籍がフーヴァー研究所ばかりでなく Meyer Library、Green Library、Auxiliary Library 等に所蔵されていることがわかる。補足すると、Meyer Library にはフーヴァー研究所から旧 East Asian Collection を移管して East Asia Library が設置されている。移管は、フーヴァー研究所とスタンフォード大学図書館（SUL）の間の業務調整の一環として、数年の準備の後、2000年から2003年にかけて行われた。所蔵資料や職員の移動内容については、移行過程で論議された問題も含めて、ネット上に公開されている。

<http://www-sul.stanford.edu/depts/diroff/hooverrealign/>

図書館組織を再編した結果、Archives は 20 世紀になってからの ‘special materials’ (personal papers, records of organizations, pamphlets, leaflets, posters, and other fugitive material) を、SUL は ‘published and trade materials’ すなわち ‘general library materials’ (books, newspapers, and periodicals) を分担して収集することになった。機関内部での流通にとどまった政府文書の収集は、Archives の管轄とされている (Hoover/SUL Realignment, Attachment 1)。これにともなってフーヴァー研究所所蔵資料の 50-60% が SUL の Green Library, Meyer Library, Stanford Auxiliary Library に移されることになった。もっとも移管問題に関する上記のサイトによれば、貴重書籍の移管についてはフ

ーヴァー側の抵抗によって一部の移籍が見送られた節がある。また、East Asia Library (Myers Library) の Japanese Studies Librarian である Naomi Kotake 氏のご教示によれば、同図書館の所蔵書籍の中にはいわゆる「灰色文献」が含まれている。実際に、旧 East Asian Collection が所蔵する中国関連資料を収録した3点の目録、すなわち中国共産党に関する書籍、定期刊行物、新聞、草稿を対象とした Hsueh, Chu-tu (1960, 1962) と、1949年以前に発行された中国の大学紀要、学術雑誌を取り扱った Tung, Julia compiled (1982) に記載されている資料を SOCRATES で検索してみると、資料は East Asia Library、Green Library、SAL に分散されている。SOCRATES による検索は、pull-down menu によって Hoover Institution Archives にアクセスし、対象を同 Archives に限定して行うことも可能であるが、こうした事情を考慮すると、全学の図書館を対象として検索を行うことも必要である。ちなみに3点の目録はウェード式の表記をとっており、検索にあたってはこれをピンイン表記に置き換える必要がある。所在を確認することができない資料も出てきたが、その理由は不明である。

Archives には文書6千万点、政治ポスター10万点が所蔵されており、これらが約5,000点のコレクションにまとめられている。SOCRATES は1977年以前に収集された一部の資料を除いて Archives の 'most of the holdings' をカバーしているが、これによって検出される書誌情報は、各コレクションの全体像に関する大まかなものである。具体的には diary, correspondence, photograph, draft 等々の形式的な特徴と 'Depicts Manchurian' といったきわめて簡単な記述の Summary、そして作成者・収集者の略歴と当該資料の作成年を把握することができる。約5,000点のコレクションのうち1,000以上のコレクションについては、SOCRATES によって検索される情報の末尾に "preliminary inventory" あるいは "register" の表記が付されている。これらの表示がついたコレクションについては、上記の情報に加えて以下のサイト (2): Online Archive in California が有力な手助けとなる。Online Archives California (OAC: <http://www.oac.cdlib.org>) はカリフォルニアの各種研究所、博物館、図書館、文書館等が所蔵している資料を対象とした digital information resource であるが、表記のアドレスは Hoover Institution 所蔵資料の検索道具 (finding aids) にリンクされている。このサイトによって、collection の下の単位となる box やその下の単位である file ごとに資料の形式的な特徴と 'relating to the political and economic development of the Far East, especially China' といった内容に関する一般的な説明、そして作成者・収集者の経歴に関するより詳細な情報を得ることができる。しかし、個々の資料の具体的な記述内容や名称については、現物を box や file から取り出すまで掴むことができない。

サイト (2) : Online Archive in California
<http://sunsite2.berkeley.edu/cgi-bin/oac/hoover>

Archives は地域別分野別に、ステابلで綴じただけの簡単な小目録を編集し、これを Reading Room で無料配布している (ex. *Hoover Institution Archives Holdings on*

China, A4 size, 60 pages)。情報の内容はサイト (1):SOCRATES で得られるそれと同じである。小目録の種類は私が数えたところでは210にもものぼり、中国関係ではChina版の他にTaiwan版、Hong Kong版が用意されている。Revolutionary版やReconstruction版でまとめられた小目録にも、上記の小目録と重複して、中国関係資料が含まれていると思われる。おそらくは時々に入れ替わる資料数の多寡によって決められるのであろうが、これらの目録が更新される期間は様々で、毎年変更されている目録もあれば数年にわたって変更されていない目録もある。China版についていえば、最新の2007年5月バージョンは2006年5月バージョンを受けて更新されており、その間に数ページ分のコレクションが増えている。2007年5月時点での資料数は398コレクションである。

Reading Roomにはこれとは別に、各資料についてのより詳細な紹介情報が著書名順にプリント・アウトされ、124冊の黒色のファイルとして綴じられている（一部は紙ボックス入）。その内容はサイト (2): Online Archive in Californiaによって得られる情報と同じであるが、この黒色の目録はたいへん便利な検索道具である。ネットで事前に検索を済ませてこなかった利用者、あるいは入館後に新たな角度から資料を探そうとする利用者は小目録によってめぼしいコレクションを探し出し、各コレクション記載欄の末尾に”preliminary inventory”あるいは”register”の表記があれば黒色の目録でさらに内容を確認してから出庫依頼を出すことになる。

閲覧時間は8時15分から4時45分までであり、係員が閲覧請求カードに基づいて書庫から資料を搬出する時間は、9時、10時半、11時半、1時半、3時に限られている。訪問前にSOCRATESやOnline Archive in Californiaにアクセスし、ChinaやJews Chinaあるいはコレクション名といったキーワードで資料を検索しておく、貴重な閲覧時間を有効に使うことができる。

2. 資料について

フーバー研究所は1919年に設立され、戦争と革命と平和という3つの基本テーマにそって膨大な資料を収集してきた。充実したコレクションを持つArchivesは、研究者ばかりでなく、マスコミ関係者によってもひんぱんに利用されており、世界中から集まる閲覧希望者は年間で約3,500人にのぼるという（同研究所ホームページ）。Archivesには2005年に急逝した*Rape of Nanjin*の著者Iris Changのコレクションも収められており、2007年1月からはReading RoomにChina Foundation for Human Rights Development（中国人権発展基金会）が寄贈した彼女の胸像が、創設者であるHerbert Hooverの胸像と並べて飾られている。

フーバー研究所についてはホームページに概況が紹介されているが、研究所ならびにArchivesの前身でもある研究所附属の東アジア図書館（East Asian Collection）が設立された経緯についてはPalm & Reed(1980)やDuignan(1989)にさらに詳細な説明があり、East Asian Collectionの活動と同館が所蔵する資料については上級研究員であるRaymon H.Myers氏が館長（Curator-Scholar, East Asian Collection）としてDuignan

ed. (1985) に解説文を載せている。

Archives に収録されている中国関係のコレクションとしては Chiang Kai-shek Diaries、T. V. Soong Papers、The World War II Diaries of General Joseph W. Stilwell が有名であり、これらについては同研究所のホームページにも Collection Highlights として解題が掲載されている。所蔵目録には中国近現代史をかじった者であれば誰もが知っていると思われる政治家や学者、たとえば Chin-kuo Chiang, Kung Hsiang-hsi, Lossing Buck, Nym Wales, Karl A. Wittfogel, Fred Uitley, Arthur N. Yong, Charles F. Remer といった人物のコレクションが並んでいる。既述のように Archives には今も貴重な資料が寄贈され、その数を増やしている。たとえば、2004 年 3 月には宋子文の残した書類が彼の子孫によって新たに寄附され、その一部が「宋子文西安事変日記」として紹介されて、西安事件の解釈に新たな手がかりを与えている（「人民網日本語版」2006 年 12 月 11 日）。

目下のところ、利用者がもっとも集中しているように見受けられるのは、Chiang Kai-shek Diaries である。蒋介石日記の公開については日本でも産経新聞をはじめとするマスコミやネット上に大きく取り上げられたが、同資料は 2006 年 3 月に 1917-31 年分が、2007 年 4 月に 1932-45 年分が公開されたばかりのホットなアイテムである。私が Archives を訪れた日には、いつも 5 人から 10 数人の閲覧者が来ていたが、このうちの半数以上が、日によっては私以外の全員がこの蒋介石日記を必死になって書き写していた。ちなみに蒋介石日記の利用については別途に特別な規程が設けられている。コピー機の利用や PC の持ち込みは禁止され、備え付けの用紙を用いた筆写のみが許可される。私自身は 1946-48 年の内戦末期の日記にあたって確認したい事実があったのだが、Archives は 1945 年以降の分については今後数年をかけて順次公開していくというスケジュールで動いており、他日の課題とせざるをえなかった。

フーヴァー研究所の Archives が持っている一つの特徴は、退役したアメリカの軍人や外交官、会社員、そして渡米した国民党関係者や白系ロシア人から寄贈された歴史資料を数多く所蔵しているところにある。第二次大戦末期から戦後の時期に焦点をあてて紹介すると、軍人・国務省関係では Clair L. Chennault, Josef W. Stilwell, Stanley K. Hornbeck, Albert C. Wedemeyer といった The China Burma India Theater に関わる将軍達や、Dixie Mission を率いた David Dean Barrett、Marshall Mission の参加者 Lee V. Harris、Economic Cooperation Administration, China の副チーフ Robert Allen Griffin、Division of Far Eastern Affairs の関係者 Stanley K. Hornbeck や Maxwell McGaughey Hamilton、Office of Strategic Services のチーフ Norwood F. Allman Papers、国民党を支援した軍事顧問 Frank Dorn、海兵隊員 John R. Chaisson 等々、多数のコレクションが収蔵されている。ただし、これら軍人・国務省関係の資料を活用した先行研究には分厚いものがある。

白系ロシア人の問題についていえば、すでに触れた *Hoover Institution Archives Holdings on China* (収録コレクション 398 点) には 51 点のロシア人コレクションが含まれている。コレクション寄贈者の多くは、中国東北を経てアメリカへ移住した

避難民である。本題から脱線するが、渡米者からの寄贈資料ということでは日系移民に関連する資料も 42 コレクションと数が多く、資料の分量が 100 box を越える大型コレクションも散見される。これらの資料については *Hoover Institution Archives Holdings on Japanese-American ---Evacuation and Relocation, 1942-1945* (December 2004, A4 size, 7 pages) に一覧することができる。

私の最大の関心は、国共内戦の末期から 1950-70 年代にかけて中国経済がどのように破壊と復興と建設を繰り返していたかということにある。したがって、*Repartations Mission to Japan* (Pauley), Kia-ngau Chang, Edmund O.Clubb 等のコレクションが一番に気になった。*Repartations Mission to Japan* は、中国東北へ進駐したソ連軍が行った産業施設の撤去がどのようなものであったのかを記録するために Pauley Mission が撮影した 85 点と、同 Mission が国民党から入手したソ連占領軍の様子を記録する 5 点からなる写真資料群である。写真はすべて中国東北で撮影されていた。記録写真は日本や朝鮮で行われた調査に際しても撮影されたはずであるが、同コレクションには含まれていない。A4 サイズにほぼ等しい大きさで印画紙に焼き付けられた画像は鮮明で、同写真群からは撤去のすさまじさが生々しく伝わってくる。多くの写真はアルバムの台帳からはがれ落ちてしまっている。このことは写真を痛めることなく複写する上で好都合だったのだが、長期的には紛失や痛みを招来するのではないかと心配になった。

Pauley Mission によって撮影された記録写真に関連しては、Calder, Alonzo Bland コレクションの中に The United States Information Service, Hong Kong がソ連批判を行うために同写真群の一部を使って出版した *Will Russia Help China's Economy?* (n.d., Box 1) を発見した。Calder は 1945-49 年に重慶のアメリカ大使館、上海のアメリカ領事館でそれぞれ First Secretary, Commercial Attache として働いていた外交官で、45 box もの資料を残している。Calder コレクションについては事前の予備知識を持たず、偶然に閲覧を依頼してみたのだが、box の中からは、国民党が攻勢にたっていた 1946 年 5 月の時点における国務省の対中樂觀論に対して批判的な立場に立ち、さめた目で国民党に対する分析を行っていた外交官の観測資料が見いだされ興味深かった。

蛇足ながら、Pauley Mission に関わる写真としては、撮影を担当していた Captain Marlin E. Fenical が個人的にアルバムを作成し、メンバーに配っている。証言を残している Rafaer Green は、報告書の草稿を文法的に訂正していた Pauley 付きの秘書官であった (<http://www.trumanlibrary.org/oralhist/greenr.htm>)。Green はアルバムを Independence (ミズーリ州)にある Harry S. Truman Library (NLHST) に寄贈しているが、こちらについて私は未見である。

Chang, Kia-ngau コレクションは、日本の研究者には張公文書として知られている。同資料については山本有造氏と井村哲郎氏の努力によって、日記部分をのぞくそのすべてがマイクロフィルム化され、アジア経済研究所に所蔵されている。同研究所から出版された解題目録『「張公文書」について』(所内資料、地域研究部 No.6-2) は、オリジナル資料を所蔵している Archives の目録よりもはるかに詳細で便利である。私

もこれらを利用してきた一人であるが、オリジナル資料を手にししてみると、やはり読み込む際の意気込みや時代状況に対して浮かんてくるイメージがひと味違ってくる。いくつか新しい発見を手にすることができた。

Clubb, O. Edmund コレクションは、24年にわたって国務省につとめ、そのうちの18年間に中国で過ごしたアメリカ外交官の資料である。Clubb は、国民党が東北の奪回に成功しつつあった1946年5月には奉天で、国民党が大陸での内戦に敗北した1949年10月には北平で総領事を務めていた。Clubb は国共内戦末期の目撃者であり、1952年に国務省を退職してからは1980年代に至るまで中国史研究者、ロシア史研究者、アメリカの対ベトナム外交を批判する外交評論家として活躍を続けた人物でもある。几帳面に残された彼の私信を読んでいくと、1952年には仕上げられていたClubbの「最初」の著作 *Witness and I* の原稿が、10社を超える学術出版社や大学出版社から次々に出版を断られ、彼が同書の刊行を先送りにして次作の執筆に取り組むことを余儀なくされていった苦しい事情が分かってくる (Box 9, File 2)。同書は1974年になって、つまり大著 *20th Century: China* (Columbia University Press, 1964) や *China & Russia; the "great game"* (Columbia University Press, 1971) そして *China* (New York Times, 1972) が成功をおさめた後になって、ようやく Columbia University Press から出版された。Clubb は駐サイゴン領事であった1941年12月には、日米開戦にともない、ハノイの地で当初はヴィシー政権下のフランス当局、ついで日本軍の憲兵隊に拘束され、八ヶ月もの 'hard and unusual throughout' な抑留生活を強いられた (Clubb, *Witness and I*, 54-8 ページ)。1952年の国務省からの離脱が McCarthy 時代に受けた糾弾を契機にしており、そうした追究を受けた要因が内戦末期の国民党に対する彼の批判的な姿勢にあったということも知ることができた。私の不勉強を曝してしまうのだが、エリート街道を歩んでいたのかと思っていたClubbが実際には苦節の多い人生を経験していたのだということを生々しく知った時には、はっとさせられた。ちなみに嫌疑が晴れたにもかかわらず失意のうちに国務省を辞職したClubbは、後に *Newsweek* 誌上で 'But as things turned out, my wife and I have had a rich second life' と語っている (Dec. 6, 1976, Box 1, File 1)。

Clubb, O. Edmund コレクションに限らず、box から取り出した手紙や写真をながめているうちに、論文の材料としては迫力不足だが、心の機微に迫り、また知らず知らずのうちに楽しさを覚えてしまう「小事」を発見することが度々あった。帰国後に提出する報告書をどうするかという不安に駆られて一瞥したばかりの資料を返却してしまうこともあったのだが、そうした発見に出会った時にはできる限り、いつかは何かの役に立つ事柄であると考えるようにした。

ところでClubbはPauley Missionの鞍山調査には同行しなかったが (Truman Presidential Museum & Library, Oral History Interview with O. Edmund Clubb, <http://www.trumanlibrary.org/orallhist/clubb.htm>)、1946年5月に国務省の指示を受けて製鉄所の施設について様子を探っている。このときにClubbが打った国務省宛の電文はCollege Parkの国立公文書館 (The National Archives at College Park, Maryland, NARA II) に残

されている。しかし、残念なことに、Clubb コレクションや上記 Oral History Interview の中にはこの電文の内容に関わる資料・情報が含まれていない。この時期の国務省の主要な中国関係資料はマイクロフィルムの形で公刊されているが (Confidential U.S. State Department central files, China, People's Republic of China, internal affairs 1945-1949, Universarsity Publication of America, Inc., 1985)、ここにも関連資料は見あたらない。Clubb は鞍山の状況を中国人から得た伝聞情報として国務省に報告しており、現地には足を運んでいなかったのかもしれない。秋には国立公文書館にも足を伸ばして、周辺資料を探索をしてみようと考えている。

(2007 年 7 月 27 日脱稿、9 月 20 日改稿)

追記 : East Asia Library の Naomi Kotake 氏と Archives の Carol A. Leadenham 氏には図書館の利用について有益な情報を提供していただいた。また Raymon H. Mayers 氏には Archives の利用について便宜をはかっていただいただけでなく、貴重な資料情報、出版情報を教えていただいた。記して感謝いたします。

参考文献

- (1) Duignan, Peter (1989). *The Hoover Institution on War, Revolution and Peace: Seventy-five Years of Its History*, Hoover Institution at Stanford University, 1989.
- (2) Duignan, Peter ed. (1985). *The Library of the Hoover Institution on War, Revolution and Peace*, Hoover Press Publication, 1985.
- (3) Hessen, Robert ed. (1983). *General Claire Lee Chennault : a guide to his papers in the Hoover Institution archives*, Hoover Institution Press, 1983.
- (4) Hsueh, Chu-tu (1960). *The Chinese Communist movement 1921-1937; an annotated bibliography of selected materials in the Chinese Collection of the Hoover Institution on War, Revolution and Peace*, Hoover Institution on War, Revolution, and Peace, Stanford University, 1960.
- (5) -----, ----- (1962). *The Chinese Communist movement 1937-1949; an annotated bibliography of selected materials in the Chinese Collection of the Hoover Institution on War, Revolution and Peace*, Hoover Institution on War, Revolution, and Peace, Stanford University, 1962
- (6) Palm, G. Charles and Reed, Dale (1980). *Guide to the Hoover Institution Archives*, Hoover Institution Press, 1980.
- (7) Tung, Julia (1982). *Bibliography of Chinese academic serials, pre-1949 : material in Hoover Institution on War, Revolution, and Peace, East Asian Collection*, Hoover Institution, Stanford University.

参考情報 : 文書館へのアクセスと資料のコピーについて

*アクセス : サンフランシスコを例にとれば Cal Train で Palo Alto 駅へ行き、そこから大学構内を走る無料のシャトルバス (Marguerite, A-Line) に乗り継いで Hoover

Institution に向かう。BART 沿線からであれば、サンフランシスコ空港駅の隣駅 Millbrae 駅で Cal Train に乗り換える。Cal Train は列車によって停車駅が異なるので注意が必要である。構内シャトルにはいくつか路線があるので、運転手に行き先を告げるのが賢明である。初日は利用者登録のために写真付きの身分証明書 (ex. パスポート) が必要である。

* コピー：複写料金は 1 枚 15 セントで、枚数については各コレクション毎に 1 学年度 100 枚以内という制限がある。複写機の性能はあまりよくない。利用規程には書かれていないが、学年は 9 月 1 日を起点にしているので、この日の前後に作業を分割すれば同一コレクションについても最多で 200 枚までの複写が可能になる。コピーした資料の再複写や第三者への配布は禁止されている。この点については誓約書を提出させられる。デジタルカメラによる撮影は、一般的には許されていない。論文や著書に精細画像を使用する場合や 3 次元映像が必要な場合等に限って、10 枚までという条件で特別に許可がおりることがある。スキャナーの持ち込みも禁止されている。

* Hoover 研究所の Archives と Library は学外者に対しても利用日数に制約がないが、Meyer Library、Green Library、Auxiliary Library 等他の大学図書館については、年間 7 日間という制限がある。これについても 9 月 1 日が起点となる。事前にターゲットを絞っておくことが肝要である。大学図書館の利用者登録は Green Library の入り口で一括して行っている。私が実際に利用したのは Green Library であるが、驚いたことに、マイクロフィルム資料のプリントアウトは無料である。フラッシュメモリーやポータブルハードディスクを持ち込んでそこへダウンロードすることも認められている。ダウンロードについては Doe Library (UC Berkeley) でも問題なく認められたので、もはや当たり前のサービスになっているといえるのかもしれない。

(まつもと としろう：岡山大学)